

学校事務職員の資質向上

－実践発表を通して－

事務指導員 西 田 邦 子
Nishida kuniko

要 旨

「学校事務職員10年経験者研修」講座において学校事務職員の実践発表を取り入れ、学校全体を見渡せる視野をもち、他の教職員とのコミュニケーションを図り、学校運営に参画していく力を身に付けるための研修プログラムの工夫・改善を行った。

キーワード： 学校事務職員、実践発表、コミュニケーション

1 はじめに

これからの学校教育において、さまざまな得意分野や専門分野をもった教職員が連携協力して教育効果を高めることが必要とされる。平成14年8月に改正された教育公務員特例法は、教員等の10年次研修を制度化するものであるが、学校事務職員の研修についても「専門性を高め、学校運営への積極的な参加を促す観点から、研修内容の見直しや充実に努めること」とされている。教育改革の流れの中、事務職員がその専門性を発揮し、積極的に学校運営に参画することが重要になってきている現状から、研修制度の充実を図ることが不可欠である。

2 研究方法

学校事務職員の資質向上を目指し、「学校事務職員10年経験者研修」講座に学校事務職員の実践発表を取り入れた研修プログラムの工夫・改善について考察する。

3 研究内容と考察

研修の手法として、従来は参加者を受動的な立場に置いた「教える」形態（講義式）が中心であった。現在は能動的な立場に参加者を置く「考えさせる」形態（討議法）や「体験させる」形態（ロールプレイング）が多くなってきた。これは、参加者が研修で得たことを職場で実践し、仕事の成果に結び付けることが、より期待できるからである。講義式の研修では、一方的に教え込まれるため意欲も低く、内容の定着が弱くなる。更に、単なる知識では職場における実践に結び付きにくいということも考えられる。研修を受けて習得した知識や能力を職場で実践していくためには、参加者自身に研修内容を納得させ、体験させるといった手法も必要になってくる。

「学校事務職員10年経験者研修」講座において、中堅の学校事務職員として必要な幅広い視野と的確な判断力を養成し、職務遂行の能力を高めることを目的として、いろいろな形態の研修技法を組み込んだ研修プログラムをこれまで考えてきたが、今年度は更に、学校事務職員の「実践」を組み入れることにした。

(1) 昨年度の研修

昨年度から「課題研修」という内容で、参加型の演習を中心にしたプログラムを取り入れている。従来の研修は、講義式研修が多かったが、研修効果を高めるためには、受講者自身が体験できる演習が必要だと考えた。学校事務職員として、職員会議や企画委員会等の中で、発言したり、問題提起したりする機会も少なくない。そのようなとき、相手に分かりやすく説明したり、自分の考えを相手に伝わるようにまとめたりしなければならない。そのためには、「話す」「書く」ことの体験的な演習が重要と考えた。

「学校事務職員として」をテーマとし、子どもたちに伝えたいことは何か、何をどのように話すか、どのような順序で話すかを考え、朝会や集会等の場面を想定して、児童生徒の前でテーマに沿って話すという演習を行った。「みんなの前で話すことが不安で、緊張して頭の中が真っ白になった。」という受講者もいたが、それぞれの個性が出ていて、筆者自身が教わる内容もあった。10分間という時間は長すぎたようであったが、回を重ねるごとに時間を上手く使えるのではないだろうか。今回の演習が単なる演習だけで終わらず、職場に戻り実践できるように行動を起こしてくれることを期待した講座であった。

(2) 今年度の研修

学校事務職員10年経験者研修講座の3日目に、昨年と同じ内容の「課題研修」に、「話す」演習に加え学校事務職員の実践報告を取り入れた。

表1 平成18年度「学校事務職員10年経験者研修」講座の内容

| | 内 容 | 研修形態（講師） |
|------|----------------|---------------------------|
| 1 日目 | 奈良県の人権教育の現状と課題 | 講義・演習（指導主事） |
| | 学校事務と教育法規 | 講義・演習（指導主事） |
| | 学校事務職員の職務と役割 | 講義（公立学校長） |
| | これからの学校事務 | バズセッション（公立学校長、事務指導員） |
| 2 日目 | 服務・休暇・休業について | 講義・演習（教職員課） |
| | 給与関係事務について | 講義・演習（教職員課） |
| | 地域福祉・介護を考える | 講義・演習（福祉パーク職員） |
| 3 日目 | 私の事務実践 | 実践報告 （公立学校事務職員） |
| | 課題研修 | 演習・バズセッション （事務指導員） |

これまでは学校事務職員10年経験者研修講座の講師には、経験豊かな学校事務職員にお願いしていた。実践報告となれば、経験を積んでいる学校事務職員がよいと思いがちであるが、受講者と経験年数に差のない学校事務職員の実践を取り入れることで、講師の学校事務職員を身近に感じ、自分自身の意識改革にもなり勇気付けられると考えた。そこで、昨年度の学校事務職員10年経験者研修講座の受講者に講師を依頼することにした。またそうすることが、昨年の演習で体験したことを実践できる場ともなるのではないかと思われた。

学校事務職員対象の講座等での講師を依頼する際、最初に返ってくる答えは「何も実践していることはありません」である。経験年数に関係なく同じ返事である。講師として話をする人は、経験豊かで名前が知られていて、すごい人でなければならないと思こんでいる学校事務職員が多いのが現状である。学校事務職員は教員と違い、児童生徒の前で話したり、校内研修等で話したりする機会は殆どない。だから、人前で話したりすることには引込み思案になる。その現状を克服するためにも、機会を見つけて人前で話す場を設ける必要性を感じる。

研修の成果や実践について、紙面や簡単な口頭での報告はできても、実際に児童生徒の前や教職員の全体の集まりの中で報告することはあまり行われていない。このような状況は、学校事務職員の職務に対する教職員の理解度の低さが原因ではないだろうか。しかし、すべての学校で、このような現状だとも言いきれない。朝会や全校集会等の中で、学校事務職員として児童生徒の前で話す機会を設けている学校もある。また、教育実習生や職場体験の中学生に学校事務職員が話す機会をもっている学校もある。このような学校は、学校という組織体として機能している。

昨年の10年経験者研修講座で研修を受けた受講者に、研修の成果を職場で実践することができたかを尋ねてみた。簡単に報告はできても、演習で体験したことの実践は、なかなか難しいことであることがわかった。

今回も講師依頼をした際、「何も実践していません。私みたいな者が講師なんて」と返事が返ってきた。しかし、お願いした2人の講師は、経験年数12年目の同期であるということ、2人で与えられた時間を使えること等の条件が合い、承諾してくれた。そして、講師をする機会を設けたことに感謝してくれた。講師のうち一人は、学校事務職員が複数配置から単数配置の学校に移り、事務研究会の役員を経験した学校事務職員である。もう一人は、市町村合併を経験した学校事務職員である。

発表当日、講師の2人は、落ち着かず緊張感が漂っていたので、緊張をほぐすために受講者と共に「サイコロトキング」をした。サイコロの目の数だけ進み、与えられたテーマでトークをするというゲームである。講師と受講者の気分がほぐれた頃に実践発表をしてもらった。

実践発表した2人の内容はおよそ次のとおりである。

講師Aさん……○新採用のとき、校長先生から「ハウレンソウ」の大切さを教わったこと。

○産休、育休の間の事務処理や書類等の整理について。

○市町村合併に伴っての市教委、校長会、事務研究会等とのかかわり。

講師Bさん……○新設校で事務職員3名からスタートして、県費事務職員の引き上げ、続いて市費事務職員の引き上げがあり、現在は、事務職員は一人であるが、その間の苦労話や体験談。

○予算を担当して事務部の長になり、やりがいのある仕事を与えられて自分に自信がもてたこと。

○近畿事務研究会の役員をして経験した事は、大きな財産である。

与えられた時間で2人は互いに進行役をしながら実践発表を終えた。昨年、テーマに沿って話したときより、遙かに成長した姿だった。話す速さ、間のもちかた、語りかけるような話し方など、完璧とは言えないが、安心して聞くことができた。研修で得た事がそのときだけのものでなく、自分のものとして実践する必要があると感じる。各自の意欲が問われると思うが、今回のように前向きに取り組んだ成果が成長につながった。

話し終えた後、講師として受講者の反応、感想を聞きたいのはだれもが思うことである。そこで、「○○さんへのプレゼント」というプリントを受講者に配布し、記入してもらった。内容は、「良かった点」「改善点」「その他気づいた点」である。これは、講座終了後に記入してもらったアンケートとは違い、受講者から本人への感想なので、生の声である。受講者自身、勇気や元気、やる気をいただいたと思うが、講師を務めた2人にとって、率直な生の声のプレゼントであった

と思う。

報告を終えた講師からは、「自分のためになるとも貴重な経験をさせて頂いた。講師を務めたことで管理職や教員の学校事務職員に対する理解も高まり、学校の中での位置付けも更に明確になった。また、2人で語り合っただけで進めていくうちに、互いの長所を見つけ合い仲間としての親交を更に深める事ができたことが思いがけない成果だった」との報告を受けた。このときの気持ちを大切に、更に資質向上を目指し、自己の研鑽を積んでほしいと願う。

今回のように講師を務めることが初めての経験である場合、不安ばかりが先に立ち、話す内容を考えるにはなかなか至らないだろう。このような機会があることにより、学校で学校事務職員の実践報告にも注目が集まることであろう。管理職や教員からも今までと違った声かけや、指導や助言が生まれてくるのではないかと思う。そして、会話の回数が増すごとに互いのコミュニケーションが図れるのではないだろうか。

講座終了後、受講者からは次のような感想が寄せられた。

- ・町村合併や市費引き上げの経験談は、身近に感じられて良かった。
「今日できる事は、きちんと終わらせてから帰る」という言葉が心に残った。
私も実践しなければと強く感じた。
- ・先輩の話聞く機会がもてて良かった。1年先輩だけなのに、お二人ともしっかりとした意志をもち、頑張っておられると思った。
- ・自分が経験していない新設校の話や対等合併の話聞いて勉強になった。
- ・経験年数の近い先輩からの話で、良い刺激になった。
私も人前で、上手に話すことができるようになるのだろうか？そして、それに伴う内容も備えることができるだろうか？
- ・一人で考えてしまいがちな職なので、他の学校の話や仕事内容を聞くことは、今後の仕事のプラスになることばかりだった。

経験年数が1年しか変わらない学校事務職員の実践発表を聞いた受講者が、まず、感動したことは、与えられた時間のなかで、堂々と話をしたことではないだろうか。「自分も、講師を務めた事務職員のように、上手に話ができるようになるのだろうか」、「いろいろ経験していないと実践報告はできないのだろうか」など、刺激と不安が一杯のなかでの研修であったと思う。また、自分の経験していない体験談や事務処理の効率化等の話を聞くことで、仕事に対する責任や学校事務職員としての自覚や誇りを感じてくれたことと思う。

「学校事務職員10年経験者研修」講座において、受講者と経験年数のあまり変わらない学校事務職員の実践発表を取り入れ、発表者と受講者が互いに刺激を受け、互いの資質を高めることが、学校事務の活性化や学校教育の課題改善に大きな役割を果たすことにつながると考える。

今後、学校事務職員としての重要性を認識し、教育行政の専門家として学校経営に主体的にかかわるためには、学校事務職員の資質の向上、能力の開発が必要になる。「全国公立小中学校事務職員研究会」からの報告の中で、これからの学校事務職員に必要とされる能力について、次のように述べられている。

- ① 経営・財政に関する知識を有し、学校運営を管理する能力
- ② 教材・教具に精通し、有効な活用及び整備を図ることができる能力

- ③ 施設・設備に関する知識を有し、その管理に十分配慮できる能力
- ④ 教育関係の法規に精通し、これを解釈・運用する能力
- ⑤ 情報を収集・整理・管理し、有効に活用、発信する能力
- ⑥ 教育に関する知識を有し、交渉力と協調性に富むこと

これらの能力は、個人の資質や努力のみで形成されるのではなく、職務に合わせた仕事が遂行できるように、体系的、組織的に行われる研修によって培われていくものであるといわれている。

4 おわりに

学校事務職員の資質向上を目指して、「学校事務職員10年経験者研修」講座に中堅の学校事務職員の実践発表を加えた。このことは、講師となった学校事務職員にとって中堅の学校事務職員としての自覚を再確認できる機会となった。また、受講者は自校にもどり、学校組織の一員として学校教育目標実現のため研鑽をつんでくれることにつながると考える。

学校事務職員は一人配置が多く、組織として職務を遂行することに慣れていないので、組織マネジメント研修や、リーダーとしての資質を向上させ、能力を開発するための研修も必要になってきている。このことを踏まえながら今後、研修講座のプログラムに工夫を加えていきたい。

参考・引用文献

- | | | |
|----------------|-----------------|------|
| (1) 各全国大会研究集録 | 全国公立小中学校事務職員研究会 | 2005 |
| (2) 効果的な研修の進め方 | ぎょうせい | 1997 |